

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

問題は次のページからです。

1 次の〔文章〕と〔詩〕を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

〔文章〕

子どもの本の世界は、名づけることにはじまります。名づけるというのは、そのものをそのもの名でよぶということです。それは、現実をはっきりと見る、見つめなおすということ。

子どもの本を読んだあとで、わたしはときどき^{※もうぜん}猛然と動物園にゆきたくすることがあります。たとえば物語に、オオヤマネコがでてくる。そうするとわたしは、オオヤマネコという動物がいると知ってはいるけれども、ほんとうは知らないことに気づく。それで動物園にゆくと、オオヤマネコなんていうのはいないのです。シベリヤオオヤマネコがいて、チヨウセンヤマネコがいて、ウンピヨウがいる。そのどれもオオヤマネコだけれども、それぞれにちがう。それで一時間ぐらいじつと見てみると、実におもしろいのです。物語がそのような仕方であまわりの世界の一つ一つにはっきりと目を向けさせてくれるということがあります。鳥だっておなじです。鳥という名の鳥はいない。木だってそうです。貝だって。

空想する力が観察する力を引っぱりだす。と同時に、観察する力によって空想する力の絞りが深くなる。そうやってあまわりの世界の一つ一つとあらためて積極的な関係を結びなおす機会を、子どもの本は読むものにあたえてくれますが、そうした積極的な関係をみずから結びなおすことができずはじめてわたしたちは、物語のなかにじぶんの場所というものを見いだすのです。

キャサリン・ストーの『ポリーとはらぺこオオカミ』(掛川^{かけがわ}恭子^{やすこ}訳)という小さな本を思い出します。それは実にたのしい本ですが、その本のおもしろさというのは、誰でも知っている、赤ずきんちゃんとオオカミの話^{だれ}を新しい読み方で読みなおして、誰もが知っているはずの話からまったく意外な物語をとりだしてくるおもしろさ。赤ずきんちゃんの物語なら先刻承知^{※せんこうち}とたかでも括^{くく}ろうものなら、たちまち[※]足もとをすくわれてしまいます。

当然こうなるはずだという物差し[※]がつかえない子どもの本の楽しさというのは、そうした自明の世界、[※]既成の世界というものを、[※]疑いやおどろきや好奇心をもって、生き生きと読みなおしてゆく楽しさです。その楽しさを通して、わたしたちのいま、ここ[※]のありようを明るくする物語の世界への通路が、日常と伝説をつなぐ通路がひらかれるので、疑いやおどろきや好奇心を

もつというのは、すべてが完了形かんりようけいで語られてしまっているような自明の世界、既成の世界にあって、なお「なすこと」の夢がいま、ここにあるんだということのみずから確かめる、あるいは発見するよろこびです。

わたしは、子どもの本の世界というのは、それを読んでいる時間というより、読み終わってから後の時間というのが非常におおきな意味をもつ世界なのではないだろうか、と書いています。その本を読んだということと読まなかったということでは、じぶんがどこかであちがってくるということが、どうしたってあります。その物語なら物語が、じぶんの心のなかに、長い影かげをどんなふうのこのすのか。それは、その物語のなかを通りぬけてくることによって、じぶんがそのときどんな経験のなかを通りぬけてきたかということですが、そうした感受性かんじせいの経験がじぶんのいま、ここを気づかないところでさささえているということが、きっとあります。

(長田弘おさだひろし「本という不思議」による)

〔注〕

※もうぜん 猛然 — 勢いの激はげしいさま。

※せんこくしやうち 先刻承知 — 事柄・事情ことがらについて以前から十分に知っていること。

※ たかでも括くくろうものなら「その程度だろうと予測したならば。

※ 足もとをすくわれて — すきを突つかれて失敗させられる。

※ 物差し — 物事の価値かちなどを判断する基準。

※ 自明 — 証明したり特とくにくわしく説明したりするまでもなく明らかなこと。

※きせい 既成 — すでにできて世にあること。

※ 感受性 — ものを感じ取る能力。

〔詩〕

木がそこに立っていることができるのは

木が木であってしかも

何であるかよく分らないためだ

木を木と呼ばないと

私は木すら書けない

木を木と呼んでしまうと

私は木しか書けない

でも木は

いつも木という言葉以上のものだ

或る朝私がほんとうに木に触れたことは

永遠の謎なのだ

木を見ると

木はその梢※こずえで私に空をさし示す

木を見ると

木はその落葉で私に大地を教える

木を見ると

木から世界がほぐれてくる

木は伐られる

木は削られる

木は刻まれる

木は塗られる

人間の手が触れれば触れるほど

木はかたくなに木になってゆく

人々はいくつものちがった名を木に与え

それなのに

木はひとつも言葉をもっていない

けれど木が微風※そよかせにさやぐ時

国々で

人々はただひとつの音に耳をすます

ただひとつの世界に耳をすます

(谷川俊太郎「木」による)

〔注〕

梢^{※こずえ}——木の幹や枝の先。木の先端^{せんたん}。

ほぐれる[※]——もつれたもの・固まったものがほどける。

かたくなに[※]——意地を張って自分の主張や態度を変えないさま。

頑固^{がんこ}。

微風^{※そよかせ}——そよそよと吹く風。

さやぐ[※]——ざわざわと音を立てる。ざわめく。

〔問題1〕文章と詩において、「名づける」とはどういうことか、

それぞれ分かりやすく、三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。

〔問題2〕問題1でとらえた二つの考え方のどちらかに必ず触れ

て、「じぶんがどこかでちがってくる」経験を具体的に三二五字以上三五〇字以内で説明しなさい。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○段落^{だんらく}を設けず、一まずめから書きなさい。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に來るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書きます。

○。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。